



永正5年(1508年)2月15日、島津第11代当主島津忠昌は突然自らの命を絶った。享年46歳であった。島津氏の内乱と日向の伊東氏、肥後の相良氏などの侵攻、地元の抵抗勢力の台頭への対応に追われ、苦しんだ末の自殺と考えられている。

忠昌は1474年、家督を継いで当主となった。しかしこの時忠昌が11歳の若さであったためか、島津氏内部でも忠昌に対して抵抗するものが現われるようになる。島津氏の分家、薩州島津家二代当主であった島津国久は、肥後の戦略をめぐって忠昌と対立。国久は所領の出水で叛旗を翻し、国分方面に侵攻したが、忠昌が救援に向いたため撤退を余儀なくされた。代わりに手薄になった加世田を占領する。同時期に国久に同じように豊州島津家初代当主の島津季久、相州島津家初代当主の島津友久が反乱を起

すが、友久は鎮圧され、季久も降伏する。この流れにやむなく国久は出水に戻り、忠昌に恭順するようになった。文明16年(1484年)に伊作(島津)久逸が島津本家に反乱を起こす。この時も、豊州島津家二代当主の島津忠廉までも忠昌に叛旗を翻した。島津国久が忠廉を説得し、忠廉が兵を収めたのをきっかけに久逸の乱は收拾することができた。

島津忠昌は文明18年(1486年)にこの乱の後の整理を行うために豪族の所領の配置換えを行い、一旦は平穏を取り戻したかのように見えた。

しかし、大隅地域では明応3年(1494年)に志布志の新納忠武と櫛間にいた豊州島津家三代当主の島津忠朝が対立するようになる。新納氏は、新納忠統の後に、その末弟の忠明が継ぎ、この頃には忠明の子忠武が新納家七代当

主となっていた。当時忠昌は忠朝を庇護していたため、新納忠武は島津宗家に反抗の氣勢を示したことになる。そして高山の肝付兼連は新納忠武に味方するようになる。

翌年には、島津忠昌は、忠朝に命じて申良城の平田兼宗の討伐を命じ、忠朝は岩弘城に侵攻し、兼宗もまたこれを迎撃した。結果、兼宗は敗れて忠朝に降伏し、忠朝は叔父の平山忠康に申良を守らせた。平田兼宗は忠昌にとつて軍事、政治において忠誠を尽くしていた家老であった。実は、同じ時期に兼宗と同じく家老職にあった村田経安も忠昌に殺されている。この頃には、平

田兼宗と村田経安の二人の家老までもが敵に成りうる状況にあつて、ここに島津宗家そのものが不安定な状況にあつたことがうかがえる。

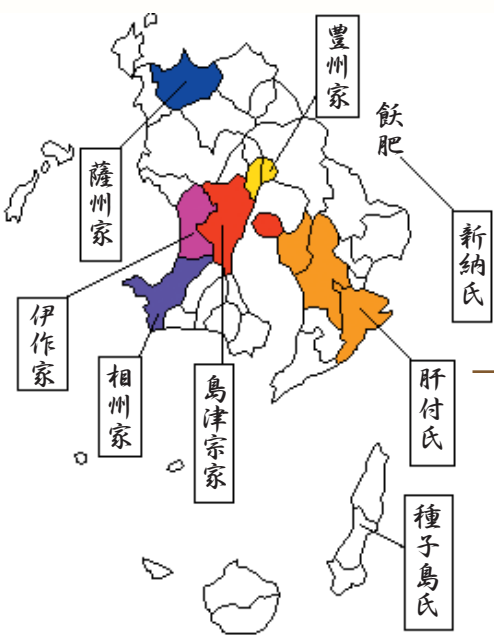
の子で肝付本家第十四代当主兼久である。兼久は急ぎ新納忠武に救援を求めた。忠昌が高山本城攻略に苦慮している最中に背後から新納忠武の襲撃を受け、このタイミングで肝付兼久も高山本城から出撃したため、忠昌は挟み撃ちに遭う形となった。結局島津忠昌は軍を立て直すことができず、敗れて鹿児島に引き上げたのである。

島津忠昌は軍事よりも、文学に優れていた。1478年には臨済宗の僧侶である桂庵玄樹を招いて朱子学を興隆させ、薩南学派の基礎を築いた。また、琉球や李氏朝鮮と積極的な貿易を奨励している。

島津忠昌の人物像について

これは、平安時代末期から鎌倉時代初頭に活躍した歌人西行の歌である。忠昌は自身も死にこの歌を添えた。「如月の望月の頃」とは釈迦入滅の時期を示す。ここに忠昌が生きてきた修羅の世界を離れた安らかな世界への願望が読みとれる。

【内村憲和】



▲忠昌期の勢力図